特別寄稿

橘覚勝の業績

――高齢者教育論と国防心理学に焦点を当てて――

Achievements of Kakusho Tachibana :
Focusing on Education for/by Old People and National Defense Psychology

長谷川　精　一・沼　田　　潤

本稿は、相愛大学総合研究センターの研究会「「大学アーカイブの構築」（2019 年 12 月 4 日）において、1963 年から 1972 年にかけて相愛女子大学教授であった橘覚勝に関して発表した内容をもとにしたものである。

は　じ　め　に

橘覚勝は日本における老年学研究の先駆者としてその名前が挙げられる。橘は、第二次世界大戦前から高齢者を対象とした研究に従事し、日本が高齢化社会になった頃から高齢者のより良い生の享受を促進する高齢者教育の重要性を指摘した。

まず橘の経歴を振り返ってみたい[1)]。1900 年大阪に生まれた橘は、1923 年に東京帝国大学文学部心理学科を卒業し、1928 年に東京帝国大学大学院を修了する。大学院生時代に日本における心理学者の先駆者である松本亦太郎に師事した橘は、師である松本から老年期の心理学研究に取り組むよう激励を受ける。そして大学院を修了した 1928 年から東京上高井戸につくられた養老院「浴風園」における高齢者調査研究に着手し、この研究が橘の老年学の議論の基盤となる。1941 年には博士論文を基に『老年期』を刊行する。戦後 1948 年に大阪大学法文学部助教授に着任し、1963 年大阪大学を定年退職した後、同年相愛女子大学教授として着任する。そして、1972 年に相愛女子大学を定年退職する。大阪大学で教鞭をとっていた 1958 年に日本老年学会結成の代表者の一人として参画し、その後高齢者の心理学研究を基に『老年学』（1971）を、さらに高齢者福祉や高齢者教育の議論を展開する『老いの探求』（1975）を出版することとなる。

本稿では、橘の行った研究の足跡を辿るために、まず、「1」において、戦後期における研究業績である老年学、特に高齢者教育に関する議論について考察し、次いで「2」において、戦中期の国防に関する議論に焦点を当てる。

1. 橘覚勝の高齢者教育

橘の高齢者教育に関する議論を取り上げる前に、日本の高齢化に目を向けたい。内閣府の「高齢社会白書」（2019）[2)]によると、2018 年 10 月 1 日の時点で日本の総人口は 1 億 2644 万人であり、その内 65 歳以上の人口は 3558 万人で

高齢化率は28.1％となっている。2029年には人口が1億2000万人を下回り、2053年には1億人を割り9924万人になるという。一方、65歳以上の人口は2042年に3935万人でピークを迎え、高齢化率も2036年に33.3％、2065年には38.4％になると予想される。橘が大阪大学在籍時の1950年では高齢化率が4.9％、『老年学』が刊行される前の1970年で7.1％であったことを踏まえると、現代の日本社会において橘が老年学の重要性を主張していた時代よりも高齢者対策は喫緊の課題であることが明白である。

日本が非常に高い高齢化率になる前から将来の日本の姿をふまえ橘は老年学に関する議論を展開してきた[3)]。橘によると、老年学とは人間の老化とその防止に対する要求に応える学問であるという。高齢者は、①加齢による身体能力の低下による不健康、②配偶者の死別によってもたらされる孤立、③引退・退職とそれに伴う減収による経済的不自由という老いの三悪といわれる課題に直面することになる。したがって、その老年学において、①生活に新しい工夫をこらし、高齢者の能力や興味関心にマッチするものを見出すこと、②高齢者自身の地位役割を自覚させ、自らの生活を開発していくように促し生きがいを探求させること、③高齢者の日々の生活における活動の萎縮や老化を防止することが重視されている。

老いの三悪に直面すると考えられる高齢者にとって、老化の防止に努め、興味関心のあるものに取り組みながら、生きがいを見つけていくことが肝要であると指摘する橘は、高齢者教育の重要性に関する議論を展開する。高齢者教育は、①「老人のための教育」（education for old people）、②「老化についての教育」（education about aging）、③「老人による教育」（education by older people）の3つに分類される[4)]。それぞれに関して以下に説明していきたい。

まず、「老人のための教育」に目を向けたい。余暇としての時間をどのように有効活用するか、身につけてきた経験をどのように有効活用するかという観点から「老人のための教育」の議論が進められ、高齢者がいつまでも明朗な生活を送ることができるような学び、高齢者自身の人生を豊かにしていくための学びとしての「生涯学習」を通して生きがいを見出すことが重視される。内閣府の「生涯学習に関する世論調査」（2018）[5)]で、多くの高齢者がインターネットを使えるようななるための学び、公民館・生涯学習センター等の講座や大学等学校における講座での学び、図書館での学びに励んでおり、今後もこれらの学びを続けていきたいと考えている高齢者が多いということが示されている。橘が示す「老人のための学び」を提供するアクターとしての大学や図書館、地域にある様々な施設の学びの機会を設ける役割は今後ますます重要になってくると言えよう。

次に、「老化についての教育」を取り上げる。健康な生活をどのように送るか、豊かな老後を迎えるための生活設計とはどのようなものかという観点から「老化についての教育」が述べられる。歳をとることでどのような健康問題に直面するか、健康な生活を送るためにどのような生活スタイルが求められるか、高齢者自身が学ぶ必要があると橘は指摘する。内閣府「高齢社会白書」（2019）によると、60歳から69歳の高齢者で健康法や栄養、スポーツに関して学びたいと希望する者が多いと指摘している。平均寿命が世界的にトップクラスである日本の高齢者にとって、健康増進を目的とする学びである「老化についての教育」の需要はいっそう高まるものと考えられる。

最後に、「老人による教育」を紹介する。社会にどのように貢献するか、これまで獲得した経験と知識をどのように社会に役立てるかという観点から「老人による教育」が議論され、高齢者は与えられるだけでなく、社会貢献活動を通して充実感を得て、それが生きがいにつながるように活動する必要性が指摘される。内閣府「高齢者の経済・生活環境に関する調査」(2016)[6]において、ボランティア活動、町内会や地域行事等の地域社会活動に取り組んでこられた高齢者から、その活動を通して「社会に貢献していることで充実感が得られる」「新しい友人を得ることができた」という意見が挙げられていることが示され、高齢者が社会貢献活動によって新たな生きがいを見出していることが伺える。橘の「老人による教育」を通して高齢者が様々な人とのネットワークを形成し、その中における自らの役割を通して生きがいを見つけていくという実践は、社会的に孤立してしまいがちな高齢者が多いといわれる日本社会において肝要であることは明白である。

内閣府（2019）は、高齢者を含めた地域全体で子どもたちの成長を支える「地域学校協働活動」や地域社会の中で高齢者が役割を持ち生きがいを見つけていく「高齢者生きがい活動促進事業」を今後いっそう推進していくと述べているが、橘の高齢者教育の考え方が基盤となっているこれらの取り組みをどのように充実させていくのかは非常に高い高齢化率を経験している日本社会の課題である。また、橘の高齢者教育の考え方が反映された取り組みを充実させていく上で、高齢者の生を支える社会のあり方も同時に模索されなければならない。少子化により高齢者を支える人々が減少している中で、どのようにすれば人口減少を抑制することができるか、外国からの移民の受け入れ等、現実的に考えるべき時を迎えている。

2. 戦中期における橘覚勝の国防に関連する業績

続いて、戦中期に橘覚勝が国防に関して残した仕事についてみておきたい。橘は、国防問題に関して、「傷痍軍人の保護と指導」、「戦場に於ける将兵の心理」、「傷痍軍人の保護と指導」、「戦場に於ける将兵の心理」という 3 つの著作を残している。「傷痍軍人の保護と指導」は、社会教育協会が 1938（昭和 13）年に発行した『教育パンフレット　第 324 輯　傷痍軍人の保護と指導』に掲載されたものであり、橘の当時の肩書として「厚生省職業顧問東京府立高校教授」と記されている。この『教育パンフレット』の前号（第 323 輯）は「現下に於る思想対策」と題されており、当時の状況を髣髴とさせる。この著作に関しては、戦時期の橘の活動の中でどのように位置づけるかをさらに検討して、次年度の総合研究センターの研究会で取り上げたい。

「戦場に於ける将兵の心理」は、1941（昭和 16）年に出された『現代心理学　第 7 巻　国防心理学』の一つの章を成すものであり、同書には、この章の他に、小保内虎夫「国防心理学の現況」、横瀬善正「防空・偽装」、望月衞「防諜・宣撫・文化工作」などの章がある。「敵愾心」は、『科学主義工業』7 巻 3 号（科学主義工業社編、1943（昭和 18）年 3 月）に載せられた論文であり、同誌の同号には、「銃剣突撃（巻頭言）」、乗富丈夫「徴用の国民的倫理」、楢崎敏雄「気魄足らず」、相澤次郎「待機的精神の涵養」、金子鷹之助「神武天皇御東征と船及び鉄」、山下清吉「研究隣組とその動向、吉識雅夫「戦争と木造船」、「決戦下の科学技術体制

（座談会）」などの論文や記事が掲載されている。以下、「戦場に於ける将兵の心理」、「敵愾心」の順で、その内容をみておきたい。

（1）橘覚勝「戦場に於ける将兵の心理」

この著作は5つの章から成る。橘は「まえがき」で、この論文のテーマに関して、「未だ嘗て戦場に於ける実戦の経験のない我々にとつては極めて執筆困難な、又、無理な問題である。今はたゞ種々な文献に、しかも少くとも文学的粉飾のない、忠実な戦争体験の記録に、その資料を得るより他に途がない」と述べた後、「一はしがき――戦場といふこと」において次のように言う。「戦場に於ては人間はあらゆる仮面を脱ぎすてて、その赤裸々な本然性が呈露される。人間の美しさも、醜さも、男らしき強さも女々しい弱さも、品性の高さも低さもみなその自然の姿に於て露出されることが屢々であるが故に、戦争の体験領域ほどすぐれた心理的観察場面は他には得られない」。「結局戦場に於て死に直面しての不安恐怖とその超克は、個人の体験とその臨界場面に於ける訓練に於て求められねばならないのであつて、この点に関する我が将兵の態度は既に理念的に戦陣訓にも明示せられてゐる」[7]（「戦陣訓」は1941（昭和16）年に陸軍大臣東條英機が示達した訓令であり、1882年（明治15年）に明治天皇が陸海軍の軍人に下賜した「軍人勅諭」の実践を目的とし、軍人としての行動規範を示したものである）。

この章に続く2つの章において「戦場に於ける自我の態度」、及び、「戦場に於ける知覚環境」について論じた後、橘は「四　戦場に於ける社会生活」において、以下のように記している。「戦場に於ける社会経験は、利己的欲求を芟除して愛国的矜持を湛へた犠牲的精神と名誉欲とを奮起せしめるといふ特殊のモラルを伴ふのであつて…第一線に於ける兵隊はより高次の民族的存在としての社会に生活するものとして、単に兵隊として祖国のために戦ふものとしてのみならず、祖国の歴史を形成する要因として尊重せられねばならないであろう」[8]。そして、橘は、『ドイツ戦没学生の手紙』から「私達が自分のことや家族のことを考へるとしたら、私たちは小さく弱くなるのです。国民や祖国や神や一切の包括的なものを考へるとしたら私たちは雄々しくなるのです」という一節を引用して、このような考えでは、「未だ家郷眷属の真情を理解しない女々しさがあるのではないだらうか。そしてそこには家族と国家とを別々に切りはなして考へてゐる矛盾が介在してゐるのであつて、我々はあくまで祖国又は国民を背景とした家族に徹底せねばならない」と語る[9]。

さらに、「五　戦場に於ける価値体験」において橘は、戦陣訓の「死生ヲ貫クモノハ崇高ナル献身奉公ノ精神ナリ、生死ヲ超越シ一意任務ノ完遂ニ邁進スベシ。身心ノ一切ノ力ヲ尽シ、従容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悦ビトスベシ」という一節は、「切に我国武士道の精神を道破したものであつて、死期に当つての道徳的錯乱とともに、死後後指を指される汚辱を戒めるものである」とし、戦陣訓が「恥ヲ知ル者ハ強シ。常ニ郷党家門ノ面目ヲ思ヒ、愈々奮励シテ其ノ期待ニ答フベシ。生キテ虜囚ノ辱メヲ受ケズ、死シテ罪禍ノ汚名ヲ残スコト勿レ」と述べているように、「廉恥、責任、名誉を重んずる心を強調せねばならなくなるのであつて、国家を背景としての家門、国民を地づらとしての郷党の期待に背かざらんやう、犠牲的精神を奮起すべきことを説く所以がある」と主張する[10]。ここで橘が戦陣訓の「郷党家門」という表現を引いて、「国家を背景としての家門、国

民を地づらとしての郷党」と述べていることに着目したい。橘は「家族」と「郷土」と「国家」との関係をどのようにとらえていたのか、それは彼の「敬老」観念に対する理解といかなる繋がりをもつのかについては、今後さらに考察していきたい。

そして、「死に対する不安の超克は『運命に委せきる』こと、『愛の大海に沈潜する』こと、『自分がより高い御手の中にある』こと、『神の御手に護られてゐる』こと、『神のもとにゆく』ことによつて達し得るのである」と説く橘は、再び『ドイツ戦没学生の手紙』から「死は一切を浄める日常の道連れ」という表現を引用して、「戦場生活体験の崇高性と厳粛性とを沁々と実感するのである」と述べる[11]。

「六　むすび」において橘の記す結論は、次のようなものだった。「記述の如く戦場心理の研究は国防心理学の第一線に立つものとしてその重要性は否定できぬ。…実践的側面から考察すれば、軍隊に於ける訓練によつて、民族性の陶冶錬成によつて、必勝を信条とする戦闘に対する兵員の心構へを教育せねばならないのであつて、こゝに国防心理学の必然性があり、我が戦陣訓の理念的価値が認められるのである」[12]。

(2) 橘覚勝「敵愾心」

続いて、「敵愾心」についてみておきたい。橘は、敵愾心をその言葉通りに解釈すれば、「相手に対して恨み怒る心」であるが、「我々の要求する敵愾心には、環境の如何を問はず、事態の如何を問はず、もっと積極的ないはゆるファイティングスピリット即ち敢闘精神の横溢する姿がなければならないのではないか」と言う。敵愾心には、「ただ癪に障るだけではなしに、負け惜しみだけではなしに、嘲笑、微苦笑を超えた道義的生命力の盛り上がった真実味がなければならない」[13]とする橘は、敵愾心の心理学的構造について、以下のように定義づける。(敵愾心とは)「他人の出現によって、目標の水準が意外にも高上していると感じる場合、又は目標を媒介として他人の水準を予想することによって、自我水準を高めようと張りきること、更に自我水準が不利な状態に陥るかも知れないと感じた場合にも自我水準を引きさげまいとする負けじ魂である」[14]。

そして橘は「私は敢然としていひたい。相手に対してただ負け惜しみをいつたり、諦めや妥協に満足して、自己の自信水準を糊塗するところにはまだほんとの敵愾心はない。あくまでも自信水準を引きさげまいとする負けじ魂、あくまでも緊張をもちつづけようとするところに敵愾心の中核体があるのだと思ふ」[15]と述べて、以下のように語気を強めるのである。「世は国をあげての戦争である。しかものるかそるかの決戦布陣である。一億火の玉となつて敵を滅尽せねばならないときである。一人二人を相手にしてゐのではない。軍隊と軍隊、国民と国民、国家と国家、民族と民族との決戦である。従つて単に武力戦だけではない。資源戦であり、経済戦であり、文化戦であり、いはゆる総力戦である。戦争環境は第一線の武力環境と同時に銃後の経済環境、文化環境にまで拡大している。そして我々はあらゆる場面に於て勝つてゐる。といつて部分的には不利な場合もなくはないであらうが、金輪際負けられない。負けてはならないのである。敵愾心とはかかる意気のなかに、緊張のなかに燃え上らねばならない」。「勿論我々国民はこの国家総力戦に対して決して冷淡ではないのである。また最後の勝利に対して一点の疑念の介入も許さず確信してゐるのである。といつて現前の壮挙に対して、戦果に対して決して安住も陶酔もしてゐないのであるが、

まだまだその点に関する心身の鍛錬には事欠くところ多いやうに見受けられる。敵愾心に対する国民性格の錬成の喧伝される所以も無理ではない。…私はかくしてわが国民性に対する自覚と反省の必須なることを認めざるを得ない」[16]。

さらに、橘は「世界文化の二方向」と題する柳田謙十郎の見解に言及し、柳田は東洋と西洋の文化について、以下のように対比的に叙述している、とする。

（東洋）	（西洋）	（東洋）	（西洋）
直感的	行為的	表現否定	表現誇張
静的	動的	伝統服従	自由創造
消極的	積極的	包括的	対立的矛盾的
受動的	能動的	和解的	闘争的
帰還的	前進的	尚古主義	未来主義
無欲本位	欲求本位	無我主義	主我主義
深化	向上	日常性	異常性
超現実主義	現実主義		

そして橘は、このような対比を言葉通りに受け取るならば、（日本に対しては）敵愾心の奮起にとって極めて不利な条件が提供されるように見え、西洋文化が対立的矛盾的、闘争的、異常性、主我主義、欲求本位、積極的を特徴とするのに対して、東洋文化が包括的、和解的、日常性、無我主義、無欲本位、消極的を特徴とするということは、東洋文化では自我水準が要求水準に対して低劣なこと、自信水準が課題水準に対して脆弱なことを示しているように思われるが、それは表面的な見方に過ぎないのだ、とする。幸いにも、「西洋の世界観が直接的、前進的対立闘争的で、東洋のそれが円環的、和解包容的だといつても、後者には既に『闘争的前進の直接的限定を内に含む和解的帰還の包容性』をもつてゐる。対立闘争の矛盾的契機を超克した愛と和の生活をもつており、言葉を換へればタイフーン的な荒魂とモンスーン的な大和の魂をもつてゐることを一応了解しておかねばならないのである」。「このような思惟を無視して敵愾心をかれこれ批議しても無駄であるが、油断して現実の思考に慣れて伝統になづまないようにしなければならない」[17]。

このように主張する橘が導いた結論は次の通りであった。「とにかく現実は時代内部の抗争ではなく、時代転換の戦争であることに深く思ひをいたすならば、そこには常に道義的生命力の発現がなければならぬ。敵愾心も道義的生命力そのものの発現であるとみるとき、敵愾心の実践的価値は直ちに見出されると思ふ。国乱に対する忠臣の憤慨も道義的生命力の発現であれば、国難に対する烈士の憤慨も道義的生命力の発現である。歴史に於ける怠惰伝統に於ける惰性を、その中にあつてそれを否定し対抗する創造的意志こそ、忠臣の憤慨であり、烈士の敵愾奮起であり、一億国民の敵愾心でなければならぬ。道義的生命力によつて推進してゆく歴史のなかに於て、一億国民の負けじ魂の発露たる敢闘精神によつて、歴史を転換せしめ、新しい文化を創造していかねばならないのである。敵愾心の実践的生命はかくして力強く生きるであらう」[18]。

(3)「戦中」と「戦後」とのあいだ

以上、戦中期に橘覚勝が書いた国防問題に関連する2つの論文をみてきたが、橘が戦中期の自らの業績に関して、戦後期にはどのように考えていたのか、また、戦中期の業績と戦後期の業績の間には、いかなる繋がりがあったのか、という点に関しては、今後、考察を進めていきたい。ここでは、後に橘との対比を試みるための予備的な材料として、橘より9年後に生まれ、橘と同年に亡くなった宮原誠一と、橘より

13 年先に生まれ、橘より 22 年早く亡くなった高村光太郎とに関して、戦中期に書いた言説と戦後期に残した記述とを示しておきたい。

宮原誠一は、1909（明治 42）年に生まれ、1978（昭和 53）年に没した人物であり、1953（昭和 28）年から 1971（昭和 46）年にかけて東京大学教育学部教授として教壇にあった。宮原は 1943（昭和 18）年に書いた『少国民の生活文化』に次のように記している。「今日、日本は国家国民の総力をあげて戦つてゐる。国家国民の総力をあげて、米英撃滅の戦争に邁進してゐるのであります。大東亜の天地から米英の思想的・経済的・軍事的一切の影響を払拭して、日本を指導者とする大東亜共栄圏を建設し、進んで世界新秩序の建設に乗りだそうとする今度の戦争が、我が国家民族の二代三代にわたる飛躍的発展を必要とする偉大な見通しをもつた戦争であることはいふまでもありません」、「新しい少国民の確立といふことは、一言でいふならば、子供はわれの子、他人（ひと）の子だとの観念を撤廃する、日本の子供は一人残らず　天皇陛下の赤子である、日本の未来を背負ふ国民であるといふ観念に徹することであります」[19]。

そして、1958（昭和 33）年の「平和と教育」において、宮原は以下のように書いている。「十八年目の“原爆の日”がくる。部分的核実験停止条約も、ぎせい者の霊にとっては、また被爆者の身からみれば、我慢ならないはがゆいものだろう。大陸から、南方の島々と海底から、北方の孤島から、土と化し藻屑と化した同胞たちの声が八月十五日をまえに私たちの耳にひしひしときこえてくる。私たちは厳粛に自己の行動をかえりみずにはいられない。…自己をいつわることはできても、歴史をいつわることはできない。人類の歴史は平和にむかって前進を続けており、平和のための教育は、過去のものではなく、こんにちのものであり、未来のものである。それは、これから世界の諸国民の教育の基本軸として発展していくだろう。日本国民が、そのことの先達となるべき格別の歴史的位置にあり、そのための格別の決意を日本国民がもつべきであることは、太平洋戦争と原爆被害の歴史的事実に変わりがないようにすこしの変わりもないのである。…十八年目の“原爆の日”と八月十五日をむかえる日本の学校の精神状況は、あるいみで太平洋戦争前夜のそれに似ているといえる。国家百年の計はおろか、数年先のみとおしさえももたずに時流に追随して怪しまない。そういう状況をくりかえすには、戦争ではらったぎせいはあまりにも大きすぎるのである」[20]。

続いて、高村光太郎（1883（明治 16）年～1956 年（昭和 31）年）の場合について、みておきたい。高村は戦中期に数多くの戦争詩を残した。例えば、次のようなものがある。

「世界の制覇者アングロ・サクソンの理念は
未だ己が地下盤石の崩れんとするを信ぜず、
ひたすら財を傾けて消耗の戦いに勝たんとする。
此戦いが理念の転回たるを知るや知らんや、
彼等盲目の復讐にただ喘ぐ。
神は精神の主権を欲したまふ。
神は物力の制覇を否みたまふ。
神の欲するところ必ず成る。
われら民族これを信じて断じて行ふ。」
（「神これを欲したまふ」部分（『読売報知新聞』、1942（昭和 17）年）

「社会百般、決戦に向ふ。
決戦とは断固として敵に勝つことだ。
敵の骨を切ることだ。
そこまで事が迫ってゐる。
わたしは美の世界を守りながら
この生活の一切をかけて彼らを撃たう。」
（「決戦の年に志を述ぶ」部分（詩集『記録』、1944（昭和 19）年））

「大東亜の資源整備せられ
国を挙げて財と数とをも亦生まん。
神明われらの上にあり、
かしこくも　天皇親しく
天祖ましますおん宮に成らせたまふ。
神の裔なるわれら固く　誓つて
ひとえに宸襟を安んじたてまつらん。
これを思ふ時全身の能力悉く目ざめ
われらの部署忽ち敵前必勝の気に満ちる。
覆滅もとより彼等のものだ。」
（「覆滅彼にあり」部分（詩集『記録』、1944（昭和 19）年））

「全日本の全日本人よ、
琉球のために全力をあげよ。
敵すでに犠牲を惜しまず、
これ吾が神機の到来なり。
全日本の全日本人よ、
起つて琉球に血液を送れ」
（「琉球決戦」部分（『朝日新聞』、1945（昭和 20）年）

これらの戦争詩は、戦後、多くの批判を浴びることとなった。空襲で家を失った高村は、宮沢賢治の弟清六を頼って岩手県花巻に移り住むが、敗戦から 2 カ月後に、花巻近郊の寒村に小さな小屋を建てて、その後 7 年間、農耕自炊の独居生活を過ごし、戦争に協力した自分の愚かさと向き合った。その時期の心情を高村は次のように語っている。「ここ（註：岩手県太田村山口の山小屋）に来てから、私は専ら自己の感情の整理に努め、又自己そのものの正体の形成素因を窮明しようとして、もう一度自分の生涯の精神史を或る一面の致命点摘発によつて追求した。この特殊国の特殊な雰囲気の中にあつて、いかに自己が埋没され、いかに自己の魂がへし折られてゐたかを見た。そして私の愚鈍な、あいまいな、運命的歩みに、一つの愚劣の典型を見るに至つて魂の戦慄を覚えずにゐられなかった。／そして今自分が或る転轍の一段階にたどりついてゐることに気づいて、この五年間のみのり少なかった一連の試作をまとめて置かうと思ふに至つた次第である」（詩集『典型』序文、1950（昭和 25）年）。

次の詩は、このような考えにより、作られたものであった。

「今日も愚直な雪がふり
小屋はつんぼのやうに黙りこむ。
小屋にゐるのは一つの典型、
三代を貫く特殊国の
特殊の倫理に鍛へられて、
内に反逆の鷲の翼を抱きながら
いたましい強引の爪をといで
みずから風切に自力をへし折り、
六十年の鉄の網に蓋はれて、
端座粛服、
まことをつくして唯一の倫理に生きた
降りやまぬ雪のやうに愚直な生きもの。
今放たれて翼を伸ばし、
かなしいおのれの真実を見て、
三列の羽さへ失ひ、
眼に暗緑の盲点をちらつかせ、
四方の壁の崩れた廃墟に

それでも静かに息をして
ただ前方の広漠に向ふといふ
さういふ一つの愚劣の典型。
典型を容れる山の小屋、
小屋を埋める愚直な雪、
雪は降らねばならぬやうに降り、
一切をかぶせて降りにふる。
（「典型」（『典型』、1950（昭和 25）年）

以上のように、宮原誠一と高村光太郎はともに、戦中期には、大東亜共栄圏、世界新秩序の建設のために必要なものとして戦争を肯定していたが、戦後の「身の処し方」は両者の間で大きく異なっていた。橘覚勝の場合も、戦中期には「一億国民の敵愾心」が不可欠であると説いていたが、戦後には自らが戦中期に為したことがらに関して、どのように考えていたのだろうか。上記のように、この点については、今後、検討してきたい。

お　わ　り　に

以上、橘覚勝の残した著作に関して、戦後期における老年学、特に高齢者教育に関する議論、及び、戦中期の国防に関する議論について検討したが、戦前・戦中期における「浴風園」における高齢者調査研究、及び、傷痍軍人の保護に関する研究について、さらに考察すること、また、それらの研究が戦後の橘の仕事にどのようにつながっていったのかに関して、より明らかにすることを、今後の課題としたい。

註

1）中川威他「老年心理学の先駆者：橘覚勝の足跡」『生老病死の行動科学』（17-18）、2014 年、9 頁から 14 頁。
2）内閣府「令和元年版高齢社会白書」2019 年。
3）橘覚勝『老いの探求』、1975 年、6 頁、7 頁、137 頁、138 頁、1975 年。
4）橘覚勝『老いの探求』1975 年、147 頁から 158 頁。久保田治助「1960 年代における高齢者の教育政策の創設と展開－橘覚勝の老人憲章〈私案〉－」『鹿児島大学教育学部研究紀要』65 巻、2014 年、55 頁から 65 頁。
5）内閣府「生涯学習に関する世論調査」2018 年。
6）内閣府「高齢者の経済・生活環境に関する調査」2016 年。
7）橘覚勝「戦場に於ける将兵の心理」（『現代心理学　第 7 巻　国防心理学』、河出書房、1941（昭和 16）年）、184 頁、185 頁。
8）同上、208 頁。
9）同上、209 頁。
10）同上、211 頁。
11）同上、214 頁。
12）同上、219 頁。
13）橘覚勝「敵愾心」（『科学主義工業』7 巻 3 号（科学主義工業社編、1943（昭和 18）年 3 月）、70 頁。
14）同上、73 頁。
15）同上、73 頁。
16）同上、74 頁。
17）同上、76 頁。
18）同上、77 頁。
19）宮原誠一『少国民の生活文化』（母性読本；第 10 編）、厚徳書院、1943 年、11 頁、60 頁。
20）宮原誠一「平和と教育」（『宮原誠一教育論集』、第 6 巻、国土社、1977 年、133 頁、136 頁）。